

見て、失ってしまったのだと思いつつになったり疲弊したり力を失ってしまう。それは失ったのではなく、どこまで行っても僕らの中でずっと持ち続けることができる。

自然発生的な会話の流れだったが、皆でその力を感じた。そこからすべてが始まるのではないだろうか。人が自然と自分の力にアクセスする瞬間が来るきっかけを持つこと、それが対話の場の一番必要な要素だと思っている。ここからスタートするのが力のある持続可能な復興ではないだろうか。飯館の人たちが大切にしてきたのは何で、これから大切にしたいのは何なのか、それぞれがオープンに話せて、その先にどういう復興（もしかすると再生かもしれない）を自分たちがすべきなのか飯館の人たちが考える場になっていってほしい。立ち位置の違う人たちがひとつのテーブルについて本当のことを話せる状況がなかったら、分断されてしまう。いろいろな人たちを歓迎していることを、どうやっていろいろな立ち位置の人たちに理解してもらうかを考える努力をするのは主催者や自分たちの役割だ。

## 大震災を振り返って

キーワードは「自立」だと思う。丸裸になって、自分で考えて判断する、自分で決めていくことに向きあう必要がある。福島にいる人たちは「かわいそうな人たち」ではなくて、福島で出会って共に動いている人たちはある種「戦う人たち」だ。それは、自立への戦い。目の前の困難を通じて、本当の自立に目を覚ました人たちだと思っている。あの困難を越えていくためには、本当に自分で考えて判断することを決心せざるを得なかった。それには痛みも伴っているが、僕らの未来に向かっていくモデルだと思う。

対話の場を通じて、飯館村や福島県の人のための対話の場ではなく、私たち皆の対話の場だと感じている。福島の体験で目を覚ました人たちの声に耳を傾けることで、僕たちが自立について自分で考えて決めていくことがどれだけ大切なのかを知る時間でもある。震災がもたらしたものは困難だけれども、どれだけ僕らがいろいろなものに依存しているかを明らかにした。目を覚ます、自立への機会だと強く感じている。

### 企業

東京都

## 大震災から約2年 私たちはどのような未来を選び、行動するのか

藪田 綾子 結結プロジェクト事務局／株式会社クレアン

取材日 2013.02.15

株式会社クレアンは「サステナブルな社会の実現」を目指し、CSRを推進している。東日本大震災への支援として「元気JAPAN！プロジェクト」を立ち上げ、被災地へ首都圏の企業を延べ300社連れていった。認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）では、東北の女性リーダーとのネットワークを中心に「結結（ゆいゆい）プロジェクト」の事務局を務める。

### 3月11日 14時46分

地下鉄の階段を上がっている時に、地震が来た。1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災で直下型地震を経験したので「東京が震源地ではないだろう」とすぐに思った。また、揺れている時間がとても長く、横揺れだったので「海側が震源だったら、津波が来るのではないかと直感した。地震直後には、街の人々は動揺し、「きゃー」と叫ぶ人やビルから飛び出す人がいた。会社に戻るとラックが落ちて書類や本などが散らばり、社内はぐちゃぐちゃだった。すぐに皆で会社の入っているビルの前にある国立科学博物館附属自然教育園前にスタッフを避難させた。震源地を皆で調べると東北らしいと分かった。おそらく電車は止まる



と予想されたので、「絶対に海側には行かないで、帰れる人は早く帰りましょう」と指示し、帰宅を促した。結局、スタッフのほとんどは電車が止まってしまったので歩いて帰宅したり、友人の家に泊まったりした。

会社のスタッフには懐中電灯やブランケット、非常食などが入った防災グッズセットを配っていたので、水や食料は困らなかった。念のため地震が収まってからすぐに近くのコンビニエンスストアに行き、会社に残っていたスタッフのためにお茶やおにぎりなどを買い込んだ。その時はまだコンビニエンスストアは混雑した様子ではなかった。

阪神・淡路大震災の経験から、自宅にはきちんと非常食や水の備蓄があり、すぐには困らなかったが、とにかく情報を集めるために、自宅の近所の沖縄料理屋さんに行った。ここは、近所の住民がいつもご飯を食べたり、飲んだりする場所で普段からコミュニティスペースになっている。地震の後にも近所の人たちが知り合いと一緒に集まってきて、いろいろな情報交換をした。私も夕方からずっとそのお店にテレビを持ち込み、情報収集をした。災害のときに改めて、コミュニティが重要だと感じた。それも普段から活発なコミュニティでなければ災害時には機能しなかつただろう。その晩は私の家に知り合いの友人4人が泊まった。

## 阪神淡路大震災の経験

阪神・淡路大震災の時、兵庫県西宮市甲子園に住んでいた。実家がお菓子屋さんだったので食べ物には困らなかったが、近所で食べ物を分け合い、1週間以上お風呂にも入れず、ガスや水道の復旧に1ヶ月近くかかり、周りには亡くなった方もいて1年ぐらいは本当に大変だった。そうした経験があるので、災害に対して他の人よりはマインド的には強いのか、今回の震災でもかなり冷静に判断できたと感じる。

けれども、普段からシミュレーションをしていないと、とっさの判断を間違ってしまう。阪神・淡路大震災の時は、ガス臭いからと換気扇をつけて引火し、火事になってしまった例があった。今回の地震の時には、ビルから飛び出す人がいた。危ないのでこれらの行動はしてはいけないと、普通に考えれば分かるが、緊急時には慌てていてなかなか正しい判断ができない。普段から緊急時のさまざまなTPOを考えて、シミュレーションしておかなければならないと思う。

阪神・淡路大震災の後に京都大学防災研究所 巨大災害研究センターの教授とつながりがあり、過去のさまざまな災害の記録をひも解いて研究する会の事務局を約10年間していた。環境と災害は切り離せない。教授から伊勢湾台風などの日本の



撮影：2012.10.19 宮城県南三陸町 第4回車座の視察

かつての災害の詳細情報やスマトラ沖地震、トルコの地震の現地調査、津波に関するいろいろな話を聞いていた。だから今回の地震の時も津波が起こるかもしれないとすぐに想定できたとし、湘南に住むスタッフに危なかつたらうちに泊まった方がいいと指示することもできた。まさかここまで広域な被害だとは想像できなかったけれども、一瞬で判断しなければならぬ状況では、事前に知識があるのとないのとでは全然違うと思う。おそらく今回も津波に関して事前に教えられていたから逃げるのができた人々がいただろう。また、津波は何度も来ることを知っていたら、自宅に戻ったりはしなかつただろう。言葉だけでなく、日頃から避難訓練をやって身体で覚えることも重要だ。

## 首都圏の企業とともに被災地へ

最初に被災地に入ったのは4月中旬だった。企業のCSR担当者から「どうなっているのか状況を把握して、自分たちにできることで支援したい」と多くの声があった。また、企業は地震発生直後から緊急支援物資や義援金を寄付していたが、「自分たちが身体を動かして直接支援したい」ニーズも多くあった。そこで、企業のCSR担当者を中心に、まずは被災地を実際にしっかりと見て、現地のボランティアを経験しながら、被災地の方々の声を直に聞いてもらうことを目的とし、「企業による石巻訪問先遣隊」を企画した。現地受入と協力を日頃からお付き合いがあるNGOにお願いし、商店街の泥かきなどのボランティアワークを含めたスケジュールを組み立て、企業に参加を呼びかけた。天ぶら油で走るバスを借りて、約50人で石巻市に入った。

初めて被災地を見た時は、テレビなどで集めた情報から自分でイメージしていた世界以上に壮絶で

愕然とした。生臭い臭いがすごくて、360度悲惨な状況だったし、津波で流されたものたちに目をやると、子どものおもちゃや洋服、椅子など…、そこには人々の生活が最近まで普通にあったとイメージできて、すごく悲しかった。最初は涙も出ないほどショックだったが、後から涙が止まらなかった。一緒に行った企業の方々は、初めて被災地を訪れた人がほとんど。本当に驚いてショックを受けていて、言葉数も少なくなっていた。その後、3～20人ほどのグループに分かれて、商店街の各店舗の泥かきをお手伝いした。水を含んだ断熱材は錘のように重く、1日ばかりでも終わらなくて、本当にきつかった。私がお手伝いしたお店はスナックで、そのオーナーがすごく喜んでくださった。津波の被害を受けても無事だったお酒が一本だけあって、オーナーに「ぜひ持って行って」と言われたが、「そんな貴重な物はいただけません。でも、絶対に飲みに来ますから！」と丁寧に断りした。これまで生きてきて、あんなに涙を流して人に喜ばれることはなかったかもしれない。

企業の方々も普段感じることもない感情を抱いたようだった。目の前にこんなに困っている人がいる中で、企業として個人として「何かできないのか」と思いが強かった。「自分たちにできることは何だろう」と、帰りのバスの中では真剣な議論が続いた。インフラ系や保険の企業の方は本業が忙しくて参加できなかったが、本当にさまざまな業種の方々に参加していただいた。企業のCSR担当者人たちは「東北の方々のために何かしたい!」とすぐに動いてくれ、ボランティア休暇制度を整えたり、社員参加のボランティアツアーを実施したりと、その後も継続したボランティア派遣に繋がった。

## 東北の女性リーダーを中心にした「結結プロジェクト」始動

2011年5月、認定NPO法人女子教育奨励会(JKSK)理事長の木全ミツ氏から「女性は行動しましょう!何かできることはないかしら」と相談の連絡があった。この木全氏の電話から「結結プロジェクト」は始まった。「結結プロジェクト」は頑張っている東北の女性リーダーたちの能力が存分に発揮されるように、首都圏のエキスパートがネットワーク連携し、共に考え、支援、協力の応援していく仕組みだ。復興活動の推進や新しいコミュニティモデル創りのために活動する東北のリーダーたちに、首都圏のエキスパートたちは資金調達、コミュニティビジネスの立ち上げ、マーケティング、特区設置の政策提言などのノウハウや人脈を無償で提供する。

第1回の車座は宿泊施設などの関係から宮城県亶理町で開催することになった。東北で頑張る女性リーダーと「東北の力になりたい」という思いを持つ首都圏の女性エキスパートたちが集う車座を企画。首都圏で活動する社会課題解決の女性エキスパートたちに声をかけると、ほとんどの方が「一緒に行きましょう!」とすぐに動いてくれた。2011年7月、参加者34名で亶理町内ボランティアセンターや津波被害エリアを訪問し、亶理町の方にお話をいろいろ聞いて、「現地課題を解決する具体的行動」をテーマとする意見交換会を実施した。その時はまだ、「現在どのような方が活躍されているのか」「これから何をしたらいいのか」現状を確認して共有する状態だった。これから一緒に考えて何か早く形にすることが大切だと思った。けれども、課題別にテーマを絞って何をするかを考えてみると、いろいろなりソースが足りなかった。特に資金だ。助成金を申請しようと思っても、申請書を書くノウハウもなかったし、どういふ助成金があるかも分からなかった。それらを自分たちで調べて、申請書類を書いた。いくつかの案件は、助成金をもらえることになった。

しかしながら、このプロジェクトでは気持ちの応援が一番大きいかもしれない。東北地域で甚大な被害を受けた状況を何とかしようと、頑張っている人たちがたくさんいた。ところが、東北の地域柄や風土かもしれないが、頑張る人たちは、頑張りすぎて浮いてしまっている状況があった。そうした中で「頑張っている人はあちこちにいるよ」とお互いに応援し合えるような仲間を作りたいかった。女性はちょっと頑張りすぎてしまうところがあるので、逆に「あまり頑張りすぎないで、頑張らなくて自然体でいいよ」とエールを送ることもある。また、地域の方々とコミュニケーション



復興プロジェクトで生まれたクリスマスのオーナメント

を密にし、「やりたい！」と言う地域の女性リーダーのサポート役に徹している。あくまでも地域のリーダーが主体で、一緒に考える形が基本だ。私たちが首都圏から提案を持っていくのではなく、現地の人が何をやりたいかじっくりお話を聞くことを徹底して続けている。

車座は定期的開催し、第2回は2011年12月に福島県いわき市で開催、第3回は2012年4月に宮城県石巻市、第4回は10月に宮城県南三陸町と回を重ね、車座で核になった方々は、現在も実行委員として12～13名、延べ参加者は200名以上となった。

## 「東北グランマのクリスマスオーナメント」復興プロジェクト

結核プロジェクトがきっかけで生まれた復興プロジェクトの代表的な成功事例は、「東北グランマのクリスマスオーナメント」だ。朝から晩まで働いてきた漁師のお母さんたちが被災で生きがいがなくなった仕事を失ってしまった状況を見て、亘理町の車座に来てくださったオーガニックコットンメーカーの株式会社アバンティ代表取締役の渡邊氏が「何かできることはあるはず」と始めたプロジェクトである。被災地のお婆ちゃん（東北グランマ）たちがオーガニックコットンの残布で手づくりしたクリスマスオーナメントを皆に買ってもらって、東北グランマたちを応援する目的だ。針仕事は皆でおしゃべりしながら進められるので、コミュニティの元気を取り戻すことができる。また、製造過程で出る残布（ざんぷ：裁断後に余った布）を活用し、環境面と経済性もプロジェクトのテーマにしている。2011年冬に行われた各地のクリスマスイベントや百貨店で販売し、オーナメントは約2万個以上売れた。2012年は継続的に地域と連携しながら新たなビジネス創出につなげるため「オーガニックコットンお守りプロジェクト」を展開している。

## オーガニックコットンを植える「いわきオーガニックコットンプロジェクト」

「東北グランマのクリスマスオーナメント」プロジェクトが成功すると、いわき産のオーガニックコットンを植える構想が登場した。

亘理町で開催された第1回の車座で、福島県いわき市から来ていたNPO法人ザ・ピープル理事長の吉田氏が、「いわきでもオーガニックコットンをやりたい」とアバンティの渡邊さんとのつながりができた。そこで2011年12月の第2回の車座は福島県いわき市で開催された。大震災以降、福



撮影：2012.10.20 宮城県南三陸町 第4回車座

島やいわきの農業を取り囲む環境は厳しく、先が見えない状況がしばらく続くと言われている。農業の再生に向けて、いわきで被災者の仕事を生み出すために立ち上がった「いわきオーガニックコットンプロジェクト」は、いわき市内の人々に動き出す機会を提供すること、新たな地域のつながりを作ること、農地の保全と活用、新たないわきブランドの発信を狙いとし、現在（2013年2月15日現在）15か所でコットンの有機栽培に取り組んでいる。ザ・ピープルが20年前から取り組んでいる古着リサイクル事業の延長線上に栽培事業を位置づけ、栽培からリサイクルまでが輪になると環境教育にもつながると考え、オーガニックコットングッズの商品開発等を行なっている。2012年11月にはオーガニックコットンの綿と種で「フクシマ・オーガニックコットンベイブ」ができた。2012年のエコプロダクツに出展し、当社スタッフも結婚式の引き出物で使って大人気だったという。2013年6月には福島県産のオーガニックコットンを混ぜたTシャツを製品化する予定だ。オーガニックコットンを通してさまざまな人がつながり、福島県いわき市では地域の広場や小学校などでコットンがすくすく育つ様子を見て、子どもも大人も「いわきも大丈夫だ！」と元気づけることにつながった。

今後の課題としては、震災から1～2年目だからオーガニックコットンのプロジェクトは、成功しているのだと思う。「東北グランマのクリスマスオーナメント」も支援したいという皆の関心が高かったから売れたのだろう。今後はきちんと商品化して、皆さんに「ストーリーがあり、可愛いから買いたい」と思って買ってもらえるようにしたいと考えている。オーガニックコットンをテーマにいろいろなプロジェクトが出ているので、できるだけ多く方にこれらの活動を知ってもらいたいと考えている。

## 今後の課題

これ以上は地域を広げすぎずに深く関わっていきたいと考えている。これまで4回の車座を宮城県亘理町、福島県いわき市、宮城県石巻市、南三陸町で開催し、第5回は2013年4月に気仙沼での開催を予定している。あまり活動地域を広げると分散してしまうし、地震直後と現在では現地の状況も社会の状況も変わってきているので、これまでと同じスキームでは動けないだろうと思う。これからはやり方を工夫しないと続かないと考えた。車座は5回でいったん終了し、第1回～5回までの参加者をうまくつないで成功事例を作りたい。これまでの車座でビジネスモデルがいくつか出てきたので、その成功事例を他地域で広げていくスキームが良いと思っている。

プロジェクトに共感した企業の方から福島県へ寄付のお話もいただいた。企業との連携もできてきたので、うまく水平展開できたらいいと思う。第1回～4回までの述べ200名の参加者の中には、核になって動いてくれている方々が100名近くいる。一緒にプロジェクトをやってくださる方々は素晴らしい方ばかりで、同じような想いを持った方々が集まってくださったからできたプロジェクトだ。私はそうした方々に「場」を提供するのが役割なのだと感じる。良い形で今後もこの共感ネットワークを広げていきたい。

## 東北で元気をもらっている

社会をサステナブルな方向に変革したいとの思いからクリーンを始めて25年、環境の仕事始めて15年になる。仕事を始めた当時は企業がCSRに取り組むかどうかも分からなかったけれども、絶対に大切だからそうならなければならないと信念を持っていた。仕事は趣味でライフワークにもなっている。社会や未来を変えるには、企業も市民も変わらなければならないし、人々の意識もライフスタイルも変えなければならない。そうした意味では東北での取り組みは社会変革にもつながっているかもしれない。

もともとは阪神・淡路大震災の恩返しをしたいと思い東北へ行ったが、実際に東北へ行ってみると大切なことに気づいた人がたくさんいた。「自分の人生において本当に大切なことってなんだっただろう、大切な人って誰だったんだろう」「限られた時間の中で何をしたいかなければならないのだろう」とさまざまなことを考えるようになった。阪神・淡路大震災の時に自分が奇跡的に生き延びて、「生きているとはどういうことなのだろう」「命があるとは何をしなければならぬのか」「これからの余生をどう生きるのか」

を真剣に考えた。被災の体験は、人生を正面から向かって見直すきっかけになった。都会では何となく人生を送る人たちが、あるいは日々を忙殺されて考える暇もない人たちが多く中で、東北へ行く大切なことに気づかされる。私は東北から元気をもらっているのかもしれない。東北で頑張っている人たちとふれ合っていると、人生や生き方を考えて、気づく機会が都会の人たちにももっとあってもいいのではないかと感じる。

実際に企業の方々に東北へ連れていくと「本質的なことが分かった」「人間が生きてとはどういうことか分かった」と言う。私たちの人生はすごくシンプルはずなのに、なぜこうして難しく考えるのだろうと思う。必要のないことやものがあまりにも多すぎるのかも。東北の人たちとふれ合っていると、そうした本質に突き当たるのだとしみじみと思う。

## 大震災を振り返って

大震災から約2年と時間が経っているので、だんだん風化している側面はある。先日気仙沼大島へ行った時も、現地の人たちにはだんだん忘れ去られているという危機感があって、復興どころか復旧も進んでいないような状況の中で置き去りにされている悲壮感を感じているようだ。これまでの支援は自分たちがちょっとできることで気持ちの応援をしようと取り組んできたが、もっと社会の仕組みの中に東北を巻き込んでいく必要があると思う。私たちが被災地の話をしても、現場を見なければ「そういうのは必要だけどね…」で終わってしまいがちだ。実際に現場を見なければ、感覚的に理解できないことも多い。日本の未来は超少子高齢化で、毎年20万人ずつ人口も減っているし、老老介護や結婚しない人々が増え、環境問題などさまざまな社会問題が出てくる。ぶち当たる壁がすぐそこにあるのに、現代の社会はみんな避けて通ろうとしているように感じる。

誤解を恐れずに言えば、震災は発想を変えるチャンスだと思う。このまま何もしなかったら、また同じことを繰り返してしまうだろう。大震災は「本当の幸せ」を見直す重要なきっかけになった。震災以降、東京ではマンションなどでBBQや餅つき大会が催され、顔の見える関係づくりや近所同士のコミュニティが見直されている。約2年が経過したことでまた意識は薄れてきているが、私たちはそうしたことが重要だと学んだ。もちろんお金も必要だけれども、お金があっても幸せではない人々は大勢いる。だからお金があるだけではなくて、問題と向き合い「本当に心豊かな生活ってなんだろう」と考え直すことが必要だ。私たちがどのような未来を選んで行動するのか、まさに今がターニングポイントだと感じている。